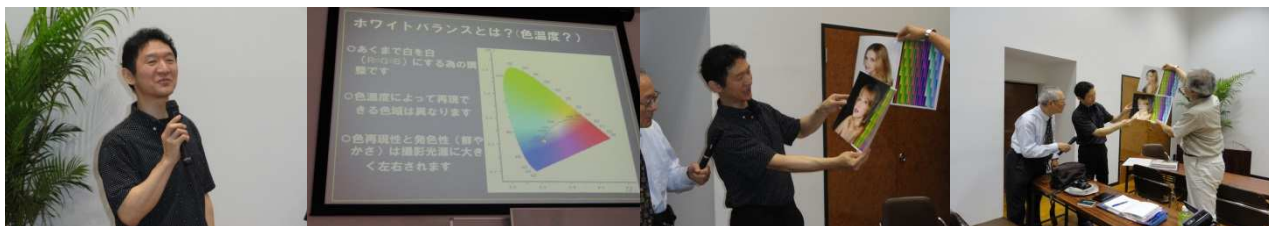


講演会：「画像」その役割と発想

講演者：英 真一 SERENDIPITY株式会社代表取締役



「本講演は、通常の学会発表では見たこともないような、色鮮やかな写真スライドを多用した魅せる講演であった。講演者の英(はなぶさ)氏は、コニカミノルタで約20年間、センサー技術と画像に関する研究開発に従事した後、独立してSERENDIPITY株式会社を設立した。この会社は、画像、映像のコンサルティングから、映像機器の開発、医療用装置の研究開発まで手がける。主な業務は、色管理(カラープロファイル)を作成することで、色を正確に再現すると同時に人が心地よいと思う画を作ることである。氏のこれまでの仕事の例として、8世紀から9世紀頃の羊皮紙にイカ墨で書かれた文字を復元する技術が紹介された。この古文書は、元の状態ではほとんど真っ白で、何か書いてあるかさえ見えないが、特殊な光源と吸収スペクトル分析によって古文書の文字を写し出すことに成功している。他にも、レントゲン等を使わずに人の外皮から内部の血管を写す技術が紹介された。これは、たまたま特殊な光源を用いた際に、体の内部が少し見えたことがヒントになっている。氏によれば、自身が過去にいろいろな状況で撮影を行って来て、そこで培われた経験が発想として頭に浮かんだ結果だという。氏の講演から、セレンディピティについて重要な示唆を得ることができた。それは、セレンディピティは偶然のきっかけや出来事の方に着目されがちだが、むしろ重要なのはそのきっかけを自分のこれまでの豊かな経験、体験と結びつけられるかどうかであるという。そのため、氏はむしろ人間は晩年になってからの方が多くの経験を活かせるので、セレンディピティと遭遇しやすいのではと語っていた。とても興味深い講演であった。

(記事：評議員 石川大介)

ワークショップ：『実践！セレンディピティの活用～ 偶然を活かすメソドロジー～』

講師：澤泉重一 SAM(Society for Advancement of Management) Director



日本創造学会では、第31回研究大会(2009年)を「セレンディピティと創造性」のテーマで開催し、その後も北陸先端科学技術大学院大学と共催の第7回知識創造支援システムシンポジウム(2010年)などで継続的にその活用についてとりあげてきましたが、このたびはクリサロの講演とワークショップという形で「実践！」の段階に踏み込むことになりました。

第1部の講演は、その名もSERENDIPITY株式会社の代表取締役社長英真一氏から「『画像』その役割と発想」という演題で、技術面で飛躍的な発展を遂げたデジタル画像の将来的展望の知られざる役割とそれを引き出す発想についての興味深い動向を、創造的開発研究に関わる最先端の立場からの実情を交えて聞くことができました。

第2部のワークショップは、「実践！セレンディピティの活用、偶然を活かすメソドロジー」という演題で、本学会員澤泉重一による活用方法論の紹介がありました。主なステップは、課題解決のための「仮説」を立て、この検証段階で「察知」したことを1サイクルとする、「仮説」と「察知」のサイクルを回しながらこれらを深めて、偶発的発見を迎えるというものです。仮説を関連付けることは創造的行動であることを認識させる手段として、フォアサイト・カードを使い故事付けのトレーニングをするなどして、「偶然の発見」は自然にやって来るものばかりではなく、日ごろからの些細な努力の積み重ねを活かせるシステム創りや、課題と観察事象間の関係性を創り出す創造的精神の大切さが主張されました。大学院MOTで30時間ほどの演習を3時間に圧縮して行ったことや、個人の演習を6人×6グループの演習に切り替えるなどした無理はありましたが、ワークショップ後には受講希望や本学会への入会希望も数名ありましたので、クリサロで取り上げた効果の手応えを感じています。

(記事：監事 澤泉重一)